

的に舞台が東京になります。地方を舞台にしたり、歴史を扱ったりということがほとんどありませんので、そういうこと自体に挑戦したいという気持ちもあります。

今日、初めて白糠町を訪れましたので、これから取材をして、勉強をして、という作業になりますので、どういうストーリーにするのか、ということもこれから考えることになります。

町の方々が全面的に支援してくださるといのは、物づくりをするうえで、とても心強いです。

Q尾崎さんは、白糠町に来たのが今日初めてということですが、これまで北海道に来たことはありますか。

尾崎…北海道に来たことはありません。2011年だと思いますが、山田洋次監督の「幸福の黄色いハンカチ」をテレビドラマでリメイクしまして、そのときは北海道の羽幌町を舞台に、脚本を作った経験があります。

Q滞在時間はまだ短いのですが、白糠町の印象は？

尾崎…東京で暮らしている人から

すると、とにかくゆったりとしている印象です。ここで生活している皆さんの心の中はどんな感じなのだろうか、という興味はあります。

Q映画制作の費用はどのくらい必要となりますか。

嘉山…そこはまだ流動的なのですが、制作、宣伝費も含めて3億円くらいになると予測しています。

Q映画の長さは？

嘉山…2時間を予定しています。

Q町を挙げて応援するということが、具体的にはどのようなことを考えていますか。

町長…白糠町で撮影をしていただけというだけで、町としては映画を通して、全国に町をPRできるような活動をし、交流人口や関係人口の増加、観光客の誘致など、地域活性の契機になればと期待しています。であれば、町としてもできる限りの支援をしていかなければなりません。これから脚本ができて、監督や俳優が決まり、いろいろなものが決まってくると、

どういう形で町として支援できるのかが見えてくるだろうと思えます。そのときに、いろいろな知恵を出しながら、積極的に応援していければと思っています。

Q先ほどアイヌ新法の話しができましたが、今後この交付金（5ペー ジ参照）を活用して支援するということはあるのでしょうか。

町長…無きにしても非ずだと思っています。先ほど『いろいろな知恵を出して』と言った中には、そういうことも含んでいます。交付金を直接映画の制作費用に充てることはできませんが、交付金を使う町の活性化が図れるような方法



棚野町長



昨年7月、嘉山代表（写真左）はウレシパチセでアイヌ伝統儀式などの映像を見たことをきっかけに、アイヌ文化に興味を持ちました。

を考えることは必要だと思っています。

町としては、映画が上映された後に、どう町の活性化につながっていくか、そこに力点を置いていきますから、たとえば、撮影場所での交流事業ですとか、映画で使われたセットを使用した事業など、いろいろな知恵を出さなければなりませんし、脚本や撮影などでも、町が協力できることはしていきたいと思っています。

Qアイヌがテーマということですが、磯部会長はどのように考えていますか。

磯部恵津子会長…とてもうれしく